

国語問題

注意事項

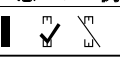
1. 試験開始の指示があるまで問題冊子を開いてはいけません。
2. この問題冊子は 23 ページです。落丁、乱丁、印刷不鮮明などの箇所がある場合には申し出てください。
3. 問題冊子および国語解答用紙（マークシート）と国語記述解答用紙が配布された後、各解答用紙の所定欄に座席番号・氏名・フリガナを正確に記入し、国語解答用紙（マークシート）の座席番号欄には座席番号を正しくマークしてください。
4. 解答は必ず国語解答用紙（マークシート）の指定された箇所に正しくマークし、記述式問題の解答は国語記述解答用紙に記述してください。マーク箇所を誤った解答は無効です。
5. マーク解答欄記入上の注意

- (1) 解答は指定された解答欄にマークし、その他の部分には何も書かないでください。例えば、

20

 と表示のある問いに対して、③と解答する場合には、次の例のように**解答番号 20**の**解答欄**の③にマークしてください。

例

良い例	悪い例
	

解答番号	解					答					欄				
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
20															

- (2) 複数の解答がある場合も、同じ解答欄にマークしてください。ただし、指示された解答数より多くマークした場合は、その解答はすべて不正解となります。
- (3) 解答用紙へのマークはすべて H B のシャープペンシルまたは鉛筆で行い、訂正する場合にはプラスチック製消しゴムで丁寧によく消し、消しくずはきれいに取除いてください。
- (4) 解答用紙は絶対に汚さないでください。また折り曲げたり破ったりしないでください。
- (5) 解答欄の所定欄以外の余白部分は、何も記入しないでください。記入したり、汚したりすると解答用紙読み取り時の誤読の原因となり、採点できない場合があります。
6. 国語記述解答用紙については、注意事項をよく読み、指定された設問について解答しなさい。
7. 試験時間中に退場することはできません。
8. 問題冊子は必ず持ち帰ってください。
9. 解答用紙は持ち帰ってはいけません。

I 次の文章は、森田真生の論説『計算する生命』の一節である。この文章を読んで、後の設問に答えなさい。

計算の歴史を繙ひもといていくとき、認識の「確実さ」をしつこく追求したデカルト*1の時代に、一つの画期を見出すことができる。*2古代ギリシア幾何学(ア)にタイゲンアされる数学的な認識に心奪われたデカルトは、数学的な思考の本質を方法として取り出し、これを他の学問にも適用していきたいと願った。彼の当初の計画のすべてが実現したわけではなかったが、哲学的な動機に駆動されたデカルトの数学研究は、代数的な計算による幾何学という、新たな数学の可能性を開いた。ここに至って計算は、もはや単なる数の操作ではなくなり、確実な推論を支える方法として、新たな生命を宿し始めた。

十九世紀のリーマン*4の時代には、数式と計算の代わりに、概念に駆動された数学が花開いた。リーマンと同じゲッティンゲンで数学を学んだフレーゲは、基礎的な概念へと遡及*6していく当時の数学の潮流のなかで、数学の最も基本的な概念である「数」を理解することに生涯をかけ、その過程で現代の論理学を生み出していった。フレーゲの挑戦は、あくまで規則に従う記号の操作に徹して、人間の思考に迫ろうとするものだった。「計算する機械」に、知能が宿る可能性をチューリングが見出すことができたのもまた、先人がこうして地道に積み上げてきた、計算を囲む文脈があったからだった。

記号を操作するだけの機械も、しかるべき規則を与えることができれば、思考することができるのではないか。ここから、機械を使って人間の知能を模倣していく、人工知能の探究が動き出していく。

いまや計算機は圧倒的な速度で膨大なデータを処理できるようになり、人工知能は将棋や囲碁などの高度なゲームでも、人間を打ち負かすまでになった。計算による予測の網は社会の隅々にまで張りめぐらされ、もはや私たちが生きる日常の一部だ。粘土の塊を一つずつ動かしていくことが計算のすべてだった時代から、こんなにも遠くまで来たのだ。

A いまなお、生命と計算の間には大きな隔りがある。人工知能の最先端の技術も、現状ではあくまで、行為する動機を外部から与えられた「自動的 (automatic)」な機械の域を出ていない。いまのところ人間は、行為する動機をみずから生み出せるような「自律的 (autonomous)」なシステムを構築する方法を知らないのだ。

生命の本質が「自律性」にあるとする見方はしかし、これじたい決して自明ではない。化学物質の配置に操られて動くバクテリアや、光に向かって反射的に飛び込んでいく夏の虫などを見ていたら、生命もむしろ、外界からの入力に支配された他律系だと感じられるかもしれない。実際、黎明期^{*8}の認知科学は、生物の認知システムもまた、計算機と同様、他律的に作動するものだ^{と仮定していたのだ}。

このとき暗黙のうちに想定されていたのは、「外界からの入力―（表象による）内的な情報処理―外界への出力」というモデルである。一見すると当たり前に思えるかもしれないが、認知主体の内部と外部に世界を画然と分かつこうした発想は、⁽²⁾認知主体を、認知主体の外部から観察する特殊な視点に根ざしていた。

このことの限界を指摘し、生命を自律的なシステムとして見る新しい思考を切り開いていこうとした一人が、チリの生物学者ウンベルト・マトゥラーナ（一九二八―二〇二一）である。

たとえば、カエルがハエを認識し、それを捕食する場面を想像してみよう。このとき、カエルを外から観察する視点からすれば、カエルの外部に、カエルとは独立した「本当の世界」があるように見える。ハエは、カエルとは独立した世界に存在していて、カエルはその外部にいるハエを内的に表象している。だからこそ、それを捕まえることができるのだ、と。

B、今度はカエルの視点に立ってみると、本当の世界などどこにもないことに気づく。カエルが経験できるのは、どこまでもカエル^{、ハエ、ハエ、ハエ}の世界でしかない。カエルの立場からすれば、入力も出力もないのだ。

認知主体の外から、認知主体を見晴らす観察者の視点に立つとき、「入力―情報処理―出力」という他律的なモデルが妥当に思えるが、⁽³⁾認知主体の立場から見ると、事態はまったく異なってくるのである。

ありのままの認知現象を捉えようとするならば、まず、認知主体の外部に「本当の世界」^{*9}を措定^せてしまふ、特権的な観察者の立場を捨てなければならぬ。マトゥラーナは、共同研究者フランシスコ・ヴァレラ（一九四六―二〇〇二）との共著『オートポイエーシスと認知』⁽¹⁾（*Autopoiesis and Cognition*, 1980）の序文のなかで、このことに気づき、生物学に対するスタンスを変えることになったケイイ^{（1）}を打ち明けている。

マトゥラーナはもともと、カエルやハトなどを対象として、生物の色知覚に関する研究をしていた。このとき彼は、物理的な刺激と、これに応答する神経系の活動の間に、素直な対応があると想定していた。つまり、客観的な色彩世界を、生物は神経細胞の活動によって「表象」^{*10}していると考えていたのだ。とすれば、やるべき仕事は、外界の色に対応する神経細胞の活動パターンを見つけ出すことにあるはずだった。

ところが、研究はほどなく壁にぶち当たった。外界からの刺激と、ハトの神経系の活動パターン^(a)の間に、素直な対応が見つからなかったのだ。同じ波長の光の刺激に対して、異なる神経活動のパターンが観測されることがしばしばあった。ハトの神経活動を調べている限り、客観的な色彩世界の存在を示唆するものはどこにもなかったのである。

C 彼は、発想を大胆に変えてみることにした。ハトの網膜と神経系は、ハトと独立にある外界を再現しようとしているのではなく、むしろハトにとっての色世界を生成するシステムなのではないか。ここから彼は、研究へのアプローチをがらりと変える。

生物の神経系は、外界を内的に描写しているのではなく、外的な刺激をきっかけとしながら、あくまで自己自身に反復的に応答し続けている。生物そのものもまた、外界からの刺激に支配された他律系ではなく、みずからの活動のパターンに規制された、自律的なシステムとして理解されるべきなのではないか。こうした着想を起点に、彼はその後、新しい生物学の領域を切り開いていく。

D、生命そのもののような自律性を持つシステムを、人工的に作り出すことは可能なのだろうか。これはまだ、誰も答えを知らない。(4) 自律的な生命と、自動的な計算の間には、依然として大きな溝が広がっているのだ。

この間隙を性急に埋めようとするとき、生命を計算に近づけようとする結果にもなりかねない。極端な話、私たち自身が外から与えられた規則を遵守するだけの自動的な機械になってしまうえば、計算と生命の溝は埋まる。スマホに流れてくる情報に反射しながら、ゆっくりと息つくまもなくせつせとデータをコンピュータに供給し続ける私たちは、計算を生命に近づけようとしているより、みずからを機械に近づけようとしているようにも見える。だが、これでは明らかに本末転倒である。

^{*13} ドレイファスはすでに半世紀前に、計算機が人間に近づいていくより、むしろ、人間が計算機に近づいていく未来の危険性を説いた。人間を超える知能を持つ機械の出現ではなく、人間の知性が機械のようにしか作動しなくなることこそ恐れるべきだと語ったのだ。

肝心なことは、計算と生命を対立させ、その間隙を埋めようとするのではない。これまでも、そしてこれからもますます計算と雑り合いながら拡張していく人間の認識の可能性を、何に向け、どのように育んでいくかが問われているのだ。

(森田真生『計算する生命』より。)

*注1 デカルト

ルネ・デカルト（1596－1650）。フランスの哲学者、数学者

2 古代ギリシア幾何学

古代ギリシアで独自に発展した、図形や空間の性質について研究する数学の分野

3 代数的な計算による幾何学

座標を使って図形を数式で記述するなどして、幾何学の問題を代数的に解き明かせるようになった。

4 リーマン

ゲオルク・フリードリヒ・ベルンハルト・リーマン（1826－1866）。十九世紀を代表する

ドイツの数学者。後の数学・物理学に大きな貢献を果たした。

5 フレーゲ

ゴットロープ・フレーゲ（1848－1925）。ドイツの哲学者、論理学者、数学者。算術を論

理学と同等の普遍的な応用可能性を持つ学問として特徴づけようとした。

6 遡及

過去にさかのぼって影響・効力を及ぼすこと

7 チューリング

アラン・マシスン・チューリング（1912－1954）。イギリスの数学者、暗号研究者、計算

機科学者、哲学者。計算機的设计や数値計算法を考案し、どんな計算でもアルゴリズム（手順）さ

え書ければ解くことができることを証明した。

8 黎明期

新しいことが始まる時期や段階

9 措定

存在するものとして考えること

10 表象

外的対象像を直観的に心に思い浮かべること

11 色世界を生成するシステム

知覚されている色は、特定の神経活動によって、外界の刺激とは異なったパターンで知覚される。

12 自己自身に反復的に応答

一定の活動パターンの中では、神経回路は外界の刺激に一对一に反応するのではなく、特定の神経

回路が、その活動を効率化するために、繰り返し応答したり、活動を維持したりすること

13 ドレイファス

ヒューバート・ドレイファス（1929－2017）。アメリカの哲学者。ヨーロッパ現代哲学を

研究するとともに、人工知能研究の理論的基礎について哲学的な批判を行った。

問一 傍線部(ア)・(イ)のカタカナは漢字でどう書くか。解答例にならない、それぞれ①～⑩の中から正しい組み合わせとなる漢字を二つ選び、順番は無視して、同一解答欄にその番号を両方ともマークしなさい。

(ア) 1

(イ) 2

(解答例) トクテイ

- ① 得
- ② 徳
- ③ 特
- ④ 匿
- ⑤ 督
- ⑥ 帝
- ⑦ 定
- ⑧ 底
- ⑨ 訂
- ⑩ 呈

答 ③ ⑦

(ア) タイゲン

- ① 退
- ② 体
- ③ 対
- ④ 帯
- ⑤ 泰
- ⑥ 言
- ⑦ 原
- ⑧ 現
- ⑨ 幻
- ⑩ 元

(イ) ケイイ

- ① 型
- ② 敬
- ③ 系
- ④ 経
- ⑤ 計
- ⑥ 緯
- ⑦ 意
- ⑧ 違
- ⑨ 移
- ⑩ 維

問二 傍線部(a)・(b)の本文中の意味として最も適切なものを、それぞれ次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

(a)

3

(b)

4

(a) 示唆する

- ① 主張が誤りであるという明確な証拠が提供される。
- ② 間接的に主張に導くような材料が明示される。
- ③ 主張を心情的に納得させてしまうような根拠が示される。
- ④ 直接的・論理的に主張を肯定する証明が提示される。
- ⑤ 主張を信じさせるようなもつともらしい証拠が並べられる。

(b) 本末転倒

- ① 本質的なことからささいなことまですべてが成り立たなくなること
- ② 最も重要なことを誤って大して価値がないと見誤ってしまうこと
- ③ 主張のもつ意味内容がまったく逆のものになってしまうこと
- ④ 根本的に重要なことと取るに足りないことを取り違えること
- ⑤ 大事なところで失敗すると細部も意味をなさなくなること

問三 傍線部(1)「先人がこうして地道に積み上げてきた、計算を囲む文脈」とあるが、その「文脈」の説明として当てはまらないものを、次の

①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

5

- ① デカルト、リーマン、フレーゲといった数学者たちによって、数学が他の学問にも適用できる思考法となっていたこと
- ② 計算機に記号を操作する適切な規則を与えることで、人間の知能を模倣していく人工知能の開発が可能になったこと
- ③ 数学的な考えが、単なる数の操作というものを超えて、確実な推論を支える論理へと広げられていったこと
- ④ 規則に則って記号を操作することにより、人間の思考に近づこうとした試みの中で現代論理学が生み出されたこと

問四

空欄 A・B・C・D

に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマ

ークしなさい。

6

- | | | | | | | | | |
|---|---|------|---|------|---|------|---|-------|
| ① | A | そして | B | いっぽう | C | とはいえ | D | それならば |
| ② | A | ところが | B | けれども | C | それゆえ | D | そして |
| ③ | A | それでも | B | ところが | C | そこで | D | では |
| ④ | A | しかし | B | むしろ | C | そのため | D | したがって |
| ⑤ | A | ただし | B | だが | C | そして | D | いっぽうで |

問五 傍線部(2)「認知主体を、認知主体の外部から観察する特殊な視点」とあるが、なぜその視点は特殊であるのか。その理由として最も当てはまるものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

7

- ① 認知主体が何を認知対象としているかは、認知主体から視点を遠ざけてより広い視野を獲得すれば分かるようになるから
- ② 認知主体は外界の認知対象をそのまま内的に表象しているので、認知の構造はその外に仮の視点をとれば分かりやすくなるから
- ③ 認知主体は外界の認知対象を内的に表象するという認知のあり方を設定し、そのあり方をさらに外側から観察できるとするから
- ④ 認知対象は必ずしも認知の外側に存在するとは限らないが、認知主体をよく観察すれば認知対象を推測できるとするから

問六 傍線部(3)「認知主体の立場から見ると、事態はまったく異なってくる」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

8

- ① どのような視点をとるかによって認知モデルは異なってしまうので、たった一つのモデルですべての認知を説明しきれものではない。
- ② 認知の外に存在している認知対象は、認知主体が自律的に認知しようと働きかけることによってしか、認知可能なものとはならない。
- ③ 認知主体の捉え方によって認知内容は変わってしまうのだから、認知主体は外界の認知対象を常に正しく認知できるとは限らない。
- ④ 認知主体は「認知されているもの」を対象とするだけであり、外界にその認知を引き起こす何かがあるかどうかは問題にならない。

Ⅱ 次の文章は、室生犀星の小説『杏っ子』の一部である。作家である平四郎が娘のピアノを購入するために出掛けた場面から始まる。よく読んで、後の設問に答えなさい。

平四郎は神田の教益商社に出掛けた。

小さい店でピアノが三台くらいしがなく、平四郎は牛山充氏の紹介状を出して、商社夫人に会った。夫人が経営しているのかどうか判らないが、美しい夫人は紹介状に眼をとおしてから、お嬢さんがお弾きになるんですかといい、平四郎はまだ九つなのだが、いまから勉強させればいくらほんくらでも、年頃になればどうやら弾けそうな気がするんですがとって、あらためて尋ねた。

「中古で結構なんです。却って中古が弾きよいそうで……」

(1) 中古はピアノに限って弾きよい筈がないのに、平四郎はでたらめを言った。商社夫人はちよつとにがい顔をしてみせた。

「中古と申しましては唯今はお間にあいませんが、月末には一台見当がついているのがございます。」

「是非それをひとつ願いたいものです。それは中古なんですか。」

「ええ、大してつかってないんですが、機械は独逸製で立派なピアノです。」

「はア、独逸製ですか。」

平四郎は独逸製なら何でもいと考え、すぐ「その独逸製に決めました。ピアノは独逸製にかぎるという話ですが、……」

平四郎はまた曖昧な諂うような顔付でいった。

「とにかく奥さんにでも、一応お弾きをねがいましてから、お気にいったらということにいたしましょう。」

「いや、家内も甚だ中古が好きなので、是非中古をと言っているんです。」

「それほどの中古ではございませんがね。」

この小説家くずれの男は、まるでピアノの知識がないと、美しい商社夫人はむやみに中古という言葉^(a)を、振り廻す男だと思った。商社夫人は一台のピアノのフタをとると、歯のようなキイのうえを恰も平四郎を脅かすふうに弾いてみせた。平四郎は突然のことで、海のような音に驚いた。

「これは和製ですがきれいな音でしょう。」

「併し独逸製なら中古でも、これよりもっと音色がいいのじゃないですか。」

「中古はやはり中古でございますからね。」

平四郎はおずおずと、これだけは確かめて置かないという腹で、時にその価格はどうぐらいのものでしようかとたずねた。

「^(ア)イタクピアノですが、何でも^{*1}六百元ぐらいかと聞きましたが、調律や機械の手入れもございますから、も鳥渡^{ちよつと}かかるかも知れません。」

「はあ、六百元ですか。」

平四郎はここぞという^{かんじん}肝腎な気張りで、たずねた。

「それは三度か二度に割ってお払いしたいのですが、牛山先生の手紙にはその事に触れていませんでしたか。」

平四郎は夫人が余り美しいので、^{あか}赧くなって言った。

商社夫人はまたピアノをぶるつと、^{*2}癩^{かん}立^だって弾いてみせた。

「牛山先生のご紹介にはその事は書いてございませんでしたが。」

「お忘れになったのかな。とにかく、そういう事にして頂きたいんですが。」

「割高にはなりますが、それでも構いません。」

平四郎は対^{あいて}手が美人である場合、普通下げる頭を美人であるために一層⁽²⁾ぺこぺこする習慣を持っていたので、商社夫人ではなく、その美人であるお礼のしるしに、⁽²⁾ぺこぺこ頭を下げて表に出た。

平四郎は一綴^{ひとつづ}りの小説の原稿を懐中ふかくいれていた。昭和四、五年代の小説家平山平四郎の原稿料というのは、諸社を通じていい合したように、一枚四円であった。何処^{どこ}からどんな工合に知れるのか判らないが、雑誌社はかんで作家の原稿料というものをちゃんと知っていて、どの雑誌も、それより^{すくな}少くも多くも支払わない、こちらが四円の原稿料を五円だと嘘^{うそ}をついても、すぐ知れるものである。そしてそれは現実に^お於いても原稿料は概略しらべ上げたように、諸社の経理は一致していた。

平四郎は小説を書いて生活することに、何時^{いつ}もかさだかなほどの、替^かけ代^かえのない感謝の勢いを感じていた。どうにもならない精神上のばかげたもの、途^と呆^ぼけたものが綴り合されると、一つの物語にあるばかと途^と呆^ぼけたものをうまく現わして行く、それが金になり食えることになる、こん

なうまい仕事はそうざらにあるものではない、既にこのばかばかしいものを突き抜けた人はえらくなり、国家は年金さえくれるし、書物は版を重ね本人すら折々おれがいたい、そんなに有名な小説家なのかい、小説家というものの資格を決定するため、国家試験とやらをやって見たらどうか、恐らく小説家で小説でそんな試験に及第する人間はかぞえるくらいしかないであろう、小説はふいに出てくる柔^{やさ}しいもので、試験なぞしたら小説の女達ははずかしがって皆かくれて了^{しま}うからである。

さて平四郎は雑誌社の階段をがりがり登って行った。自分の原稿を雑誌社に持って行くときほど作家は、たとえ頼まれた原稿であっても憂鬱^{ゆううつ}極まりないものではなく、今度はうまく書けなかったが、どうしても渡せばそれで気が済む、しかし原稿が手元にあるあいだは夜鳴きをつづけて睡^{ねむ}られない、原稿は鳥^{からす}のようなものだ、放せば立つ、そして再び戻ってくる時はまずいつらをしたままだである。

平四郎はそのピアノの金を作らなければならない、その頃作家の依頼される枚数は、五十枚が限度だった。一枚四円として六百円の調達は、小説三篇^{さんぺん}の値であり枚数にして百五十枚であった。その枚数が、詰りに詰つていまでは、小説は二十五枚から三十枚が限度になり、時勢は美事^{みごと}に枚数を半分に引き裂いていた。

雑誌社の応接間にいる二分三分五分間という時間に、平四郎は文学の過去の顔が、意地悪い形相^{ぎようそう}をつき出して、何時もにたにた笑って、どうだね景気は好い方かねとか、ずいぶん大きなつらをしているな、足もとは確かに踏みしめているのか、というようなものを感じ、五分間のあいだに十年くらいの文学の労苦をひと互^{わた}り見渡すように、強いられていた。その一綴りの原稿というしろものが、想像もつかない貨幣の価値をもつことに、どうだお前はもう一遍考え直して見る気はないかな、何処^{そこ}に行っても役に立たないお前は、其処^{そこ}で、いま替えられた貨幣を待つということに、なにも不安はないかどうか、平四郎は郵便や使でとどけられる原稿料には、なにも考えないのに、雑誌社を訪れるときさまざまな問題が、なかなか鋭利に突きこんでくることを感じた。⁽⁴⁾ なによりもその大きなつらと、ふてぶてしい構えとお前は何処^{どこ}でまなんで来たのだという、最後までこの言葉が、平四郎の前にあった。

受持の記者の人が原稿料を平四郎に手渡しして、平四郎は記名調印を済ますと、その金を懷中にしまいこんだ。そして雑談の末にピアノ購入の件をべらべら喋^{しゃべ}り、六百円というのはダトウ⁽¹⁾の価格であるかどうかの意見を聞いてみたが、記者の人は言った。

「それは中古ですか。」

平四郎はきょうは殆ど中古という言葉聞き通しに、耳にいられた。

「中古は中古だが、新品も同様のピアノらしいんです。」

平四郎は階段を下りて街路に出た、⁽⁵⁾あの応接間にはあまりにもたくさんの顔があつて、どれも知合いであるが、まだ見ない顔もある、まだ見ない顔は、見ないでも見たような絶望の顔なのだ、その絶望の顔はもはや再度とあそこに、^{すわ}坐りに行かない顔なのだ、つまりそれは持ちこんだ原稿を突き返された顔なのだ。平四郎はあの応接間をまんまと、一綴りの原稿を置いて貨幣に替えて通つて来たのである。平四郎は懷中に手をやって見て、金はいっているというつら構えをして、歩き出した。おれは^{すり}掏兎ではないが、^{すり}掏兎であり、^{すり}騙りではないけれど騙りであり、一種のゆすりのようなものさへ併せて感じた。つまり原稿というもののあくどい邪氣が、何処までも頭の中を^{いやおう}否応なしに掻き廻してくる、原稿のまぼろしや、ゆうれい共が平四郎の生涯について廻るのである。

平四郎は家にもどると、^ま先ず、ふたたびその慣用句を喋った。

「中古がいいピアノがあつた。」

「まあ、嬉しいこと。」と、りえ子がいった。

平四郎の顔を見ながら杏子が言った。

「お父さまはピアノの中で寝るの、寝る寝るというじゃないの。」

「ピアノとならんで昼寝をするのさ。」

「そう。」

杏子は不思議そうに平四郎の顔を見た。

*注1 六百元ぐらい この小説で描かれている昭和四、五年頃の一万円の価値は、現在なら数千円になると推測される。仮に三千円から

五千円程度だとすると、当時の六百元は現在の百八十万円から三百万円の価値に相当する。

2 癪立って いらいらして

3 騙り 人を騙して金品を巻き上げる人。詐欺師

問一 傍線部(ア)・(イ)のカタカナは漢字でどう書くか。解答例にならない、それぞれ①～⑩の中から正しい組み合わせとなる漢字を二つ選び、同一解答欄にその番号を両方ともマークしなさい。

(ア) 10

(イ) 11

(解答例) ケツコウ

- ① 欠
- ② 結
- ③ 傑
- ④ 血
- ⑤ 潔
- ⑥ 講
- ⑦ 構
- ⑧ 更
- ⑨ 候
- ⑩ 好

答 ② ⑦

(ア) イタク

- ① 以
- ② 依
- ③ 委
- ④ 維
- ⑤ 位
- ⑥ 卓
- ⑦ 宅
- ⑧ 択
- ⑨ 拓
- ⑩ 託

(イ) ダトウ

- ① 駄
- ② 惰
- ③ 墮
- ④ 妥
- ⑤ 打
- ⑥ 投
- ⑦ 頭
- ⑧ 当
- ⑨ 討
- ⑩ 闘

問二 傍線部(a)・(b)の本文中での意味として最も適切なものを、それぞれ①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

(a)
12

(b)
13

(a)
むやみに

- ① 様々な根拠を示し、順序立てて
- ② 冷静な分析に基づき、客観的に
- ③ 相手の応答に配慮し、言葉を選んで
- ④ 周囲の状況を考慮せず、身勝手に
- ⑤ 特に深い考えもなく、繰り返して

(b)
ざらにあるものではない

- ① 外見とは異なり、内実が伴わないものである
- ② どこにでもある、ごくありふれたものである
- ③ ごく稀^{まれ}にしか巡り合えない、貴重なものである
- ④ 非常に困難で、短期間では成し得ないものである
- ⑤ 才能がなければ、長く続けられないものである

問三 傍線部(1)「中古はピアノに限って弾きよい筈^{はず}がないのに、平四郎はでたらめを言った」とあるが、平四郎がこのように言ったのはなぜか。その理由として最も適切なものを次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

14

- ① 中古品に対する偏見を逆手に取り、あたかも中古の方が価値があるかのように装うことで、商社夫人に対して価格交渉を有利に進めようと試みたため
- ② 実際には新品のピアノは高価すぎて買えないという経済的な事情を隠して、美しい商社夫人に対して好印象を与えたい見栄の意識が働いたため
- ③ 妻がどうしても中古のピアノを欲しがっており、その希望を叶^{かな}えるために、中古品を積極的に肯定することで商社夫人の理解を得ようとしたため
- ④ 独逸^{ドイツ}製のピアノに対する盲目的な思い込みがあり、たとえ中古であっても和製のものより優れていると信じて疑わず、その信念に基づいて発言したため

問四 傍線部(2)「ぺこぺこ頭を下げて表に出た」とあるが、この時の平四郎の心理として最も適切なものはどれか。次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

15

- ① 高価なピアノを値切れなかったという不満と、親切に対応してくれた商社夫人に対する感謝の念が、複雑に絡み合っている。
- ② 商社夫人があまりに美しいせいで、経済的な窮状を悟られないように張っていた虚勢が崩れてしまったことを隠そうとしている。
- ③ 商社夫人の対応に気押されて商談の主導権を握れなかったことに情けなさを感じつつ、夫人の美しさに畏敬の念を抱いている。
- ④ 平四郎の経済的な窮状を察して良質な中古ピアノを手配してくれる商社夫人の心映えの美しさに感銘を受け、感謝している。

問五 傍線部(3)「原稿は烏からすのようなものだ、放せば立つ、そして再び戻ってくる時はまずいつらをしたままである」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

16

- ① 原稿は、執筆中も発表後も憂鬱な気持ちにさせられるもので、常に精神的に大きな負担を強いる存在だということ
- ② 原稿は、執筆中にどんなに苦勞した作品でも、発表後は作家のコントロールを離れてしまう虚しい存在だということ
- ③ 原稿は、執筆中は作家を苦しめ、まずい作品に原稿料をもらう際には自責の念を感じさせる存在だということ
- ④ 原稿は、発表後は独立した価値を持つようになり、作家の予想とは関係なく新たな展開を生み出す存在だということ

問六 傍線部(4)「なによりもその大きなつらと、ふてぶてしい構えとをお前は何処でまなんで来たのだという、最後までこの言葉が、平四郎の前にあった」とあるが、雑誌社を訪れた平四郎はどのようなことを感じていたのか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

17

- ① 雑誌社の編集者たちが、平四郎の作品を正当に評価せず傲慢な態度を取っていることへの憤り
- ② 自身の文学的才能を過信し、謙虚さを欠いていたことに気づいたことから湧き起こった反省
- ③ 自身が、作家と呼ばれるにふさわしい価値のある作品を書くことができているのかという自問
- ④ いくら原稿を書いても、貧しい生活から脱却できない自分自身に対する自己嫌悪と無力感

問七 傍線部⑤「あの応接間にはあまりにもたくさんの顔があつて、どれも知合いであるが、まだ見ない顔もある、まだ見ない顔は、見ないでも見たような絶望の顔なのだ、その絶望の顔はもはや再度とあそこに、坐りに行かれない顔なのだ、つまりそれは持ちこんだ原稿を突き返された顔なのだ」とあるが、平四郎が感じている文学の世界とは、どのようなものか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

18

- ① 自己の芸術性よりも出版社の意向に合わせることを強いられ、作品の商業的成功が最優先される、実利主義の世界
- ② 過去の実績は色褪せるため、常に独創的な作品を生み出し続けなければならないという、創造の重圧が重い世界
- ③ 一度でも低い評価を受け失敗者という烙印を押されしまうと、再起は極めて難しくなってしまう、薄情な世界
- ④ 成功した作家がばかばかしい文章で原稿料をもらう一方、渾身の作品が一銭にもならない人もいる、理不尽な世界

問八 本文全体を通して、平四郎はどのような人物として描かれているか。最も近いものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

19

- ① 世間の価値観に縛られず、文学作品を執筆することに強い信念と誇りを持って創作活動を続ける、偏屈なまでに純粋な人物
- ② 小説の原稿料を得て生活できることに自負と感謝の念を持ちつつも、自分の作品に自信が持てず、屈折した気持ちを抱えた人物
- ③ 妻子のささやかな幸せを守るために、プライドを捨てて時代に迎合した商業作品を執筆する、時流を読むのに長けた現実的な人物
- ④ 社会の不合理に対し強い批判精神を持つが、自身では現状を変えられないという無力感を感じている、知的ながら諦念を抱えた人物

問九 本文の内容と一致しないものを、次の①～⑥の中から二つ選び、同一解答欄にその番号を両方ともマークしなさい。

20

- ① 商社夫人が平四郎にピアノを弾いてみせたのは、彼のピアノに対する無知さに苛立ちを覚え、音色の良し悪しが分かるのか試そうとする意図があったからである。
- ② 平四郎が中古のピアノを購入することにこだわったのは、娘がまだ九歳と幼く、高額なピアノで練習するべき年齢には達していないことが、最大の理由である。
- ③ 平四郎は妻子と温かな関係を築いており、日常的に他愛ない会話も交わし、ピアノを購入する件もかねてから話していたことがうかがえる。
- ④ 雑誌社で原稿料を受け取った際、平四郎は中古のピアノを六百円ほど出して購入することに不安を覚えていたので、受持の記者にピアノ購入の件を喋った。
- ⑤ ピアノ購入の件を聞いた際に受持の記者が「それは中古ですか」と尋ねたのは、貧しい平四郎が無理をしてピアノを購入することを皮肉るためである。
- ⑥ 文学界の経済状況は厳しくなっており、以前は小説を三篇書けば六百円べんの原稿料が得られたところを、現在は五～六篇書かなければならなくなっている。

Ⅲ 以下のそれぞれの設問に答えなさい。

問一 次の(1)・(2)の四字熟語の空欄に入る漢字を、解答例にならない、それぞれ①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

(1)

21

(2)

22

(解答例) 三

--

 四温

- ① 漢
- ② 乾
- ③ 甘
- ④ 寒
- ⑤ 閑

(1) 一知

--

 解

- ① 版
- ② 反
- ③ 半
- ④ 判
- ⑤ 班

(2) 大言

--

 語

- ① 広
- ② 大
- ③ 膨
- ④ 壮
- ⑤ 小

答 ④

問二 次の(1)・(2)に示した熟語の対義語を完成するために、解答例にならない、それぞれ①～⑧の中から正しい組み合わせとなるものを二つ選び、
 順番は無視して、同一解答欄にその番号を両方ともマークしなさい。

(解答例) 拡大 ↑ ↓ ☐ ☐

- ① 小
- ② 尺
- ③ 縮
- ④ 弱
- ⑤ 減
- ⑥ 贈
- ⑦ 刷
- ⑧ 少

答 ① ③

(1) 衰退 ↑ ↓ ☐ ☐

- ① 優
- ② 増
- ③ 発
- ④ 加
- ⑤ 新
- ⑥ 勢
- ⑦ 展
- ⑧ 奇

(2) 嗜好品 ↑ ↓ ☐ ☐ 品

- ① 味
- ② 有
- ③ 趣
- ④ 必
- ⑤ 益
- ⑥ 構
- ⑦ 需
- ⑧ 虚

(1) ☐ 23

(2) ☐ 24

問三 次の(1)・(2)・(3)の慣用句に最も近い意味のものを、【選択肢】①～⑩の中からそれぞれ一つ選び、その番号をマークしなさい。

(1)

25

(2)

26

(3)

27

- (1) 尻尾を出す
- (2) 尻尾を巻く
- (3) 尻尾を振る

【選択肢】

- ① 口を滑らす
- ② 尻馬に乗る
- ③ 媚びこを売る
- ④ 怒髪天を衝く
- ⑤ 水を差す
- ⑥ 舌を巻く
- ⑦ 白旗を上げる
- ⑧ 軒を連ねる
- ⑨ 音頭おんどを取る
- ⑩ 馬脚を現す

問四 次の(1)・(2)・(3)のことわざに最も近い意味のものを、【選択肢】①～⑩の中からそれぞれ一つ選び、その番号をマークしなさい。

(1)

28

(2)

29

(3)

30

- (1) 覆水盆に返らず
- (2) 破れても小袖
- (3) 井の中の蛙^{かわず}

【選択肢】

- ① 出藍の誉れ
- ② 目の上のたんこぶ
- ③ 失敗は成功のもと
- ④ 柳に雪折れなし
- ⑤ 後悔先に立たず
- ⑥ 転んでもただでは起きぬ
- ⑦ 腐^{たい}っても鯛
- ⑧ 石の上にも三年
- ⑨ 夏の虫氷を笑う
- ⑩ 笑う門には福来る